

船井情報科学振興財団 留学(前)報告書

第1回: 留学先決定に至るまでの経緯

0. はじめに

Funai Overseas Scholarship (FOS) 2023 奨学生の大島知子と申します。2014年に東京大学前期教養学部理科二類に入学し、2017年に医学部医学科に進学して2021年に卒業しました。卒業後は2年間長野県にある長野赤十字病院で初期臨床研修を行い、2023年9月からスタンフォード大学博士課程に進学予定です。米国大学院進学にあたり大変多くの方々に支えてもらったため、今度は自分が大学院留学を検討されている方々に少しでも有用な情報を提供したいと思いつつこの報告書を執筆しました。非常に長くなってしまったので、以下の目次をご活用いただければ幸いです。見出しをクリックすると各項目に飛べるようになっています。

目次

0. はじめに	1
1. 医学部に進学した経緯	2
2. 初期研修を行った理由	2
3. 大学院留学を目指した理由	2
4. 出願先の選定	3
5. 結果	4
6. 出願過程に関する情報	5
6-1. 前置き 1: 主要項目の重要度とアプローチ	5
6-2. 前置き 2: 情報リテラシーの重要性について	6
6-3. Statement of Purpose (SoP) / Essay	6
6-4. Diversity Statement など SoP 以外の essay	7
6-5. 推薦状	7
6-6. Curriculum Vitae (CV)	8
6-7. GPA	8
6-8. TOEFL	8
6-9. GRE	9
6-10. 証明写真	9
6-11. Supporting materials	9
6-12. 面接	9
7. 謝辞	11

1. 医学部に進学した経緯

高校生の頃に漠然と生命科学研究が面白そうだと思い、理科二類に入りました。入学後、そもそも研究とはどんなものなのかを早めに知りたいと思い、大学1年生のときにいくつかの研究室にメールを出して見学に行ってみました。その過程で自分が興味を持った研究室の多くが医学部・薬学部であり、そこで初めて医学部でも基礎研究ができるんだ！ということに気づきました。理科二類の主な進学先は理工学部・農学部・薬学部で、理科三類以外から医学部に行くのは一般的ではないのですが、当時の進学振り分け（現・進学選択）という制度を利用して医学部に進む道がありました。ダメもとでチャレンジしてみようと思い、進学希望先: 医学部と入力して提出しました。結果は一步及ばず、第2希望の薬学部に進学することにしました。すると、家族から「もし1年待って医学部に行ける可能性があるなら留年する価値はあるのでは?」と想像もしなかったアドバイスをもらいました。希望の学部に行けるかどうかは大学1-2年生の授業の成績で決まり、年によってボーダーラインが変動するため、確かに翌年なら行ける可能性もありました。普段はお金にうるさい父が「その分の学費を払ってもいいよ」とうっかり口走ったこともあって、「これはチャンスかも」と1年留年して再度医学部への希望を出してみることにしました。翌年無事に医学部に進学することができました。その後は素晴らしい研究室との出会いがあり、忙しくも充実した学部生活を過ごしました。

2. 初期研修を行った理由

私自身の研究に対するモチベーションには、①細胞が自律性を保つ原動力を知りたいという基礎医学的な側面と②疾患の治療法開発に貢献したいという臨床的な側面がありました。②については臨床医になりたかったわけではなく、どう実現すれば良いか分からなかったため一時放置していましたが、研究成果を臨床医学に応用するという形で②を実現している基礎系研究者の存在を知り、同様のアプローチで長期的に②を達成できるのではないかと考えるようになりました。一般に、基礎医学での研究成果と医療現場で実際に使われている薬剤や治療法の間には何段階ものギャップがあります。そのギャップを乗り越えて効果的に成果を臨床に応用するためには、研究の出口としての医療現場の実際を自分の目と手で経験する必要があると考え、初期研修をしてから研究の道に戻ることにしました。研修を行ったのは長野県で、20年以上住んでいた東京の地を離れて働くことには不安もありましたが、結果的には素晴らしい出会いに恵まれ、忘れがたい2年間になりました。初期研修を経て臨床の重要性や楽しさに気づき、臨床医になる可能性も検討しましたが、時々訪れた検査部で遠心機の蓋が開く音（自分が研究室で使っていたものと一緒でした）を聞いてはたと立ち止まる自分がいて（笑）、やはり研究に進みたい気持ちが変わらないことに気づきました。そこで、研修修了後は当初の予定通り大学院へ進学することにしました。

3. 大学院留学を目指した理由

大学院に進学するにあたり、分野やテーマをどうしようかと考えたときに、米国大学院進学という思わぬ選択肢が頭に浮かんできました。このアイデアに至った理由としては、

- ・学部時代の研究を行う中で、新たに興味が出てきた分野があったこと
- ・その分野の有名な成果や教科書の多くがアメリカから出ていたこと
- ・大学2年生から何となく留学という選択肢を知っていて、漠然と興味があったこと

が挙げられます。実際には急に思い立ったので後からの分析にとどまりますが…。

最初に留学という選択肢を意識し始めたのは2016年、2回目の2年生のときです。せっかくなので「今まで時間がなくてできなかったけどやりたかったこと」をやってみようと思い、1年生の時に見学に伺った農学部の研究室に通い始めて実験の基礎を学んだり、コンピュータ・グラフィックス (computer graphics: CG) を学んだりといくつか新しいことに挑戦してみました。その中で、「自分で主体的に研究プロジェクトにかかわる経験がしてみたい」と思い、教養学部の授業を履修する形で [BIOMOD](#) という学部生向けのナノ分子工学の大会に参加しました。大会の一連の流れは、主に DNA origami という技術を使って機能性分子を設計し、実験を行ってその成果を発表するというもので、その集大成として Jamboree と呼ばれる口頭発表会がアメリカの UCSF で開催されました。そこで初めて海外の学部生の研究発表に触れ、大会全体のオープンな雰囲気や、エンターテイメント要素も交えた発表としてのレベルの高さに感動しました。また、この大会の後に、当時前期教養学部の授業でお世話になっていた先生のご紹介で、UCSF や Stanford にいらっしゃる日本人研究者の方々にお会いする機会をいただきました。そこで日本とアメリカで研究者として生活していく様々なメリット・デメリットを耳にして、研究留学に関して

- ・狭き門である
- ・大変なことも多いが、状況を味方につければ他では得られない経験や成長ができる

という印象を持ちました。また、この時にお会いした研究者の方から FOS 2016 の鄭麗嘉さんをご紹介いただき、帰国後に学内のカフェで大学院留学に関するお話を伺いました。そのときにいただいた留学準備に関する資料を普段持ち歩くファイルに保管し、そのままの流れで研修先の長野県に持っていきました。まさかその7年後、この資料にどれほど助けられることになるか当時は想像すらできませんでした。

このような経緯から留学は漠然と頭の片隅にありました。そのため、研修医2年目の5月にいざ大学院での研究について考え始めたときに具体的な選択肢として自然と浮上してきたのだと思います。

4. 出願先の選定

基本的には研究室ベースで決めました。学部時代の所属研究室とは分野が変わるため自力で研究室を探して連絡を取る必要がありました。システム生物学に分野を定めてから、主に面白い論文を見つけて責任著者から研究室のHPをたどったり、名前を聞いたことのある大学の該当学科の研究室一覧を見たりしました。加えて、[iBiology](#) や YouTube の公開セミナーなども重要な情報源になりました。プレゼン形式の発表の場合、話者がどこに興味を持って研究しているか、どの点

が面白いかなどのポイントが分かりやすく、効率良く研究内容を知ることができるのでお勧めです。また、私自身は COVID-19 の影響や仕事の関係上叶いませんでしたが、気になる分野でオンラインのセミナーやレクチャーがある場合はぜひ積極的に参加すると良いと思います。研究内容を知るだけでなく、PI と直接話すことのできる絶好のチャンスです。

複数のアプローチで希望の研究室リストを作ったら、その研究室が所属する学科やプログラムについても調べました。この過程は後の SoP を書く際に役立ちます。というのも SoP では基本的に「何故当該プログラムを希望するのか」という内容を含める必要があります。ここで「○○研究室があるから」という理由だけでは弱くリスクが高い（：○○研究室に行けなかった場合に根拠が無くなってしまう）ため、プログラム自体の特色も押さえて理由付けすると良いからです。学科・プログラムの特色は捉えづらい面がありますが、学科 HP のメインページ（Overview, About Us など）にそれとなく書いてあることが多いです。また、学科長の挨拶ページがあればそこに方針が示されている例もあります。複数のプログラム同士を比較することで、「この学科は基礎にこだわっている」「このプログラムは実学的な側面が強そう」などの傾向が見えてくると思います。その中で、自分の方向性に合うプログラムかどうかを見極めて出願先の選定の参考にするのがお勧めです。

このような過程で少しずつ出願プログラムを絞り、最終的に以下の 6 校に出願しました。次の項で結果と合わせてお示しします。

5. 結果

Graduate School	Graduate Program	Any contact with PI	Results
Stanford University	Chemical and Systems Biology	Yes, online meeting	合格
Caltech	Biology and Biological Engineering	Yes, e-mail only	書類選考落ち
UCSD	Bioengineering	No reply	
UC Berkeley	Bioengineering (Quantitative Biosciences Consortium)	No reply	
UCSF			
MIT	Computational and Systems Biology	Yes, 「プログラムに受かってから連絡してください」	
Rockefeller University	Bioscience	Yes, e-mail only	

第一希望のみ合格し、他は書類選考落ちという驚くべき結果でした。表にして眺めると、出願前に非公式のオンラインミーティングを行ったところのみ合格しているのです。出願前のコンタクト・ネットワーキングが重要ということは言えそうです。いずれも出願年に初めてメールを出してコンタクトを取りましたが、実際に希望の研究室に行って実験や discussion をする経験が皆無だったことがマイナスに働いた可能性はあると思います。

また、出願から結果までの期間については、Stanford は 11/29 に書類提出後、12/21 に書類選考通過の連絡、2/15-17 の面接を経て 2/19 に非公式に採用の可能性が高いことと入学辞退の確率を問うメールが届きました。諸事情により合格発表が遅れて 3/25 になりましたが、合格した Stanford については全体的にレスポンスが早かった印象です。他の 5 校は 12/21 に書類選考落ちのメールが送られてきた Rockefeller を除いて 1-4 月の面接期間まで音沙汰がなく、ある程度結

果に察しがつきました。ただ、もちろん連絡の来るタイミングは大学院やプログラムによって様々だと思います。

次項からは出願の具体的なプロセスについて記載していきます。

6. 出願過程に関する情報

6-1. 前置き 1: 主要項目の重要度とアプローチ

各提出書類の解説に入る前に、項目の重要度や提出項目として現れない部分について触れたいと思います。私の考える主要項目の重要度は以下の順です（個人の意見として参考程度にお考え下さい）。

1st. 出願先とのネットワーキング, 研究業績

2nd. SoP, 推薦状

3rd. GPA

4th. CV

まず、出願先とのネットワーキングは確実に重要です。ただし、これは≡現在の所属研究室のPIから希望先の研究室のPIへの紹介と勘違いされがちですが、実際にはそれにとどまりません。自分でサマープログラムに参加する、研究インターンを探すというのも素晴らしい関係性の構築手段と考えられます。また、そういった経験ができなくても、自分で研究室にメールを送って返事をもらえればネットワーキングになります。メールの内容としては、

- ・自己紹介と目的 例: 「〇〇大学△△学部3年生で、20XX年度のサマープログラムに参加したいです」
- ・自分の興味
- ・これまでの研究, 研究業績
- ・その研究室の仕事で特に興味があるもの
- ・自分がその研究室にもたらすメリット
- ・奨学金 (あれば)

の全項目を合わせて~10行以内で簡潔に記載するのがお勧めです。件名も重要で、既に奨学金などの受給が決まっている場合は、例えば”Inquiry on a PhD position — fully funded with a scholarship”のように目的に合わせて明記すると良いと思います。効果的な件名によって1日に何百何千件のメールを処理しているPIの注意を引き、メールを開いてもらう可能性を上げるためです。実際には返事が来ないことも多々ありますが、気にすることなく興味のある研究室に何か所もメールを送ってみることが重要です。

研究業績については、現在の所属研究室で取り組んでいる研究に集中することに尽きると思います。何らかの理由でどうしても今の研究が形になる見込みがない場合は、短期留学などで他の研究に触れてみるのも1つの手かもしれません。

SoP, 推薦状については後述します。SoPについて一言付け加えると、良いSoPを書くには自分の興味や Scientific question を明確に把握しておくことが必要です。私自身は大学前期課程の頃は特に自分の興味がどこにあるのかよく分からず、少しでも「面白そう」と思った様々なことに挑戦する中で次第に志向がはっきりしてきた経緯があり、留学に関係なく自分の興味を見

定める試みはその後の進路にも大きくプラスに働くと考えています。これが次の GPA の捉え方に関わってくるのですが、海外大学院出願において GPA が重要なのは否定できない一方で、大学生活では授業の枠にとらわれず好きなことを探すのも大切なことだと思います。そこで GPA への向き合い方として、個人的には以下のように提案します：

- ・まず海外大学院出願において GPA は重要であることを知っておく
- ・大学生活でやりたいことを犠牲にしない範囲で、できる限り良い成績を保つ努力をする
- ・目標の GPA を達成できなかった場合は他の点でアピールすることを考える

6-2. 前置き 2: 情報リテラシーの重要性について

各論に入る前にもう 1 点述べておきたいことがあります。それは海外大学院進学における、情報の収集と集約の重要性です。海外大学院を目指す人口は恐らく一握りです。そのため必要な情報を集めるのが大変だけでなく、母集団の小ささに起因する情報の偏りやばらつき、誤情報の流布が起り得ます。これを解決するには、以下の対策が考えられます：

情報収集

- ・インターネット検索ではできる限り多くの情報源からニュートラルに情報収集を行う
- ・[XPLANE](#) などの統合データベースを活用する
- ・実際の留学経験者の話を聞く：一連の出願プロセスを全て経験しているため

情報集約

- ・ページ内検索ができるようにデジタルメモなどを使って集めた情報を 1 か所に集約する
- ・奨学金の募集要項、大学院出願フォームや探しづらいページのリンクをメモに貼っておき、必要なサイトにたどり着く手間や苦勞を 1 回に抑える

私自身は、海外留学をされている方のブログを見かけたり、妹から勧められたりしてデジタルメモツールとして **Notion** (無料版) を使っていました。表や画像、PDF、URL などの様々なデータ形式を集約することができ、UI も優れているのでお勧めです。

船井情報科学振興財団の過去の奨学生の方々の留学報告書には貴重な情報が詰まっていたため、項目ごと (SoP, GPA, 面接など) に分けてスクリーンショットをメモに貼り付けたりしていました。

6-3. Statement of Purpose (SoP) / Essay

前置きが長くなりましたが、ここからは各書類に関して個別に記載していきます。まず、SoP またはシンプルに essay と呼ばれる書類は、日本語で言う志望動機書や研究計画書に近い文章です。しかし客観性を徹底した研究計画書とは異なり、文章としての面白さ、つまりカタカナでイメージするエッセイに近い要素が入ってきます。これは膨大な書類に目を通す審査委員の印象に残るための工夫と考えられます。そのため SoP のノリは独特で、なるべく多くの例を読むことでノリを”学習”し、形式に慣れることが必要です。それにはまず、FOS 2017 の石原みやびさんの報告書にもある通り [Graduate Admissions Essays](#) という書籍がお勧めです。お勧めの理由は複数ありますが、特に強調したいのは

- ・50 編の具体例が掲載されていること

・ SoP に留まらず米国大学院出願の全体像がつかめること

の2点です。私は出願年の5月にこの本を通読し、その後 SoP を書く際には書籍の誘導に従って自分のこれまでの経験を研究との関連の有無にかかわらず思いつくり付箋に書き出してみました。その中から、SoP に使えそうなエピソードをピックアップして全体の構成を考えました。要素としては過不足なかったものの今一つピンとくる書き出しが思い浮かず、全体的に鈍い文章にしかならなかったため数日間頭を悩ませました。1週間ほど経過したときに偶然夜に寝付けなかった日があり、夜中にベッドで天井を見ながらぼーっとしていたところ急にこれだ！という順番と書き出しを思い浮かしました。そのまま起きて PC を開き、メモ帳に日本語と英語の混じったルー大柴さんのような文章を書き散らしました。いったん骨格ができてしまうと大分ハードルが下がり、その3日後には SoP のベースを書き上げることができました。これは偶々うまくいっただけかもしれませんが、SoP に入りたいエピソードを列挙して数日寝かすのも有効なのではないかと思います。SoP は最終的に各大学院に向けてカスタマイズが必要になりますが90%は共通骨格が使えます。オンライン出願フォームで SoP の詳細な要項が確認できるようになる出願期間開始時には、SoP のベースの文章があった方が良いでしょうと思います。作成した SoP (ベース) は、FOS 2018 の大岸誠人さんと、大学の先輩である E さんにチェックしていただきました。

6-4. Diversity Statement など SoP 以外の essay

実は、大学院出願時には SoP 以外にも提出する必要のある essay が存在します。特に Diversity Statement は多くの大学院で求められ、SoP と同程度の記述量を求められるため重要度もそれなりに高いことが推測されます。私は出願の直前になって初めてそれらの存在に気づきとても焦った経緯があるので、これから出願を検討される方々にはぜひ知っておいていただきたいです。同じ過ちを繰り返さないためには、出願用のオンラインフォームでアカウントの作成が解禁された時点でできる限り早くアカウントを作ってしまうことが重要だと思います。募集要項のページのみから得られる情報には限りがあり、具体的な提出書類の課題文や分量、形式などは実際の出願フォームを見てみないと分からない場合が多いです。私の出願したプログラムでは、SoP, Diversity Statement 以外に高等数学の素養や COVID-19 による大学生活への影響などについて短い essay を要求されました。

いずれにしても、提出する英文は SoP だけではない、出願アカウントはすぐに作って出願フォームを出来るだけ早く確認することをぜひ心にとどめていただければと思います。

6-5. 推薦状

初めて留学の話聞いた大学2年生の時は、「推薦状を3通ももらうなんて大変そう」と漠然と思いましたが、実際に出願した際は①所属研究室の教授、②直接の指導教員、③学内の自主セミナーでお世話になった同じ研究棟の違う研究室の先生、の3方に恐る恐るお願いしたところ快諾していただきました。私にとっては研究者として尊敬してやまない理想的な3名の先生方だったため、大変幸運でした。推薦者となる人は多忙を極めている場合が多くお断りされる可能性もあるので、7-8名程度の推薦者候補リストを作って上から順番に打診するのが良いと

思います。自分のことを良く知っている人を書いてもらうのが一番のポイントです。また、一般に言われることとしては、1 名以上のアメリカ人研究者（出願先の国の研究者）からの推薦状を加えた方が効果的なようです。

6-6. Curriculum Vitae (CV)

日本語で言う履歴書です。見やすく最新の情報が掲載されていれば全く問題はないのですが、大岸さん (FOS 2018) の報告書で他の候補者との差別化のためにパワーポイントで作成したという項目を読み、パワポ好きなことも相まって気分転換も兼ねてパワポで作成しました。英語で"curriculum vitae format (template)"などで画像検索すると参考になります。

6-7. GPA ボーダーライン: 3.5-3.7, 専門科目で C 以下が無いこと

ここからはスコア系に入ります。いずれも成績開示や送付のタイムラグを考え、1 か月以上の余裕を持ったスケジュールで準備を進めることを心掛けた方が良いでしょう。表題の横に一般に言われるボーダーラインを付していますが、諸説あるので参考程度にご参照ください。

米国大学院進学において GPA が重要なのは否定できず、更に日本とは異なり前期教養課程・後期専門課程などに分けて評価されたり学年が上がるごとの成績の変化などを見られたりと細かい分析が行われます。しかし逆に言えば、「1・2 年生の時は慣れない大学生活で良い成績が取れなかったけれど、専門課程に入ってコツをつかみ、GPA が 0.7 も上昇した」などの説明が可能です。プログラムによっては「あなたの成績に関して付け加えたい情報があれば以下にどうぞ (COVID-19 による影響の例)」という言い訳欄があったほどです。

GPA の重要性は高い一方で、他の項目で挽回不可能というわけでもありません。正直ボーダーラインをクリアするのはかなり大変です。このラインを多少下回っていても合格している人は少なくありません。GPA が低いというだけで出願を諦める必要はないと思います。

また、東大のように公式の GPA を出さない方針の大学もあります。その場合自分で GPA を計算する必要がありますが、プログラムによっては「自分で計算した場合、その計算過程を Excel ファイルなどで提出してください」としているところがありました。他にたくさん出願書類の準備を抱える中で、この作業は無視できない負担でした。そこで解決策として、World Education Services (WES) という国際的な信用評価機関に GPA スコアを計算してもらうという方法があります。1 回 \$217 ほどの料金がかかり、カナダの本社に自大学から厳封の英文成績証明書を送付してもらう必要があるため 1 か月ほどの時間もかかることが難点ですが、計算の手間が省けるだけでなく、評価結果としての GPA が大学の公的書類と同等に扱われるという大きなメリットがあります。また、見聞に留まりますが GPA が高めに出る傾向にあるようです。私は出願時に WES の存在を知らなかったため利用できませんでしたが、入学決定後に求められることも多いため利用して損はないと思います。

6-8. TOEFL ボーダーライン: 100/120 (S23/30)

TOEFL についての詳細は他の方に譲りますが、注意すべきは大学院によってはセクションごとにボーダーラインを設けていることがある点です。特に UCSD のプログラムでは Speaking

セクションで23/30という高いスコアを求められ、私自身は残念ながらこの基準に達しませんでした。公式問題集だけでなく日本語の TOEFL 用参考書などを用いてセクションに絞った対策をしていくと良いと思います。

6-9. GRE ボーダーライン: V155/170 Q165/170 AW3.5/5.0

米国大学院入試に求められる統一試験で、大学入試共通テストの大学院版のようなイメージですが、少なくとも **Biology** 系では近年廃止方向で、提出が任意だったりそもそも不要と明記されているプログラムがほとんどでした。そのため受験しませんでした。

スコア関連の情報をまとめた表を以下に掲載します。費用についても参考程度に触れていますが、これらに加えて実際の大学院出願に\$50-\$155/校かかりました。

	GPA	TOEFL	GRE
正式名称	Grade Point Average	Test Of English as a Foreign Language	Graduate Record Examination
概要	成績スコア	英語能力試験	米国大学院入試に求められる統一試験
ボーダーライン	3.5-3.7/4.0 専門科目でC (2.0) 以下が無いこと	100/120 (S23/30)	V155/170 Q165/170 AW3.5/5.0
自分のスコア (参考)	3.67	100 (R29 L30 S19 W22)	未受験
費用	\$217 (WES ICAP)	\$245+スコア送付\$20/校	\$205+スコア送付\$27/校
補足	<ul style="list-style-type: none"> 成績を理由に諦める必要は全くないが、意外と見られているかもしれない 日本と異なり、教養課程・専門課程ごとに分けて計算したり、トレンド (経時的変化) を見られたりする 専門課程のGPAの方が重要視される 積極的に「言い訳」してOK! (この時期はコロナで気分が沈んでいたため成績が振るわなかった) など。ただし簡潔に、最後はポジティブに締める GPAの計算スプレッドシートを提出させられて面倒だった経験あり 優上、優=4.0、良=3.0、可=2.0、不可=0 World Education Services (WES) などの信用評価機関に一任しても良いかも メリット: 計算の手間が省ける、公的信用あり、GPAが高めに出る (らしい) デメリット: 手続きが面倒、高額 	<ul style="list-style-type: none"> 必要なのはTOEFL iBT 足切り程度のものでいい 大学院によってはセクションごとのボーダーを設けているところもあるので要確認 セクションに絞った対策 	<ul style="list-style-type: none"> GRE general/subjectの2タイプがあり、通常要求されるのはGRE general だが近年は廃止の方向 Verbal(V), Quantitative(Q), Analytical Writing(AW)の3セクションから成る V≧超マニアック英単語、Q≧≦センター数学、AW=英作文 受験する場合はVとAWに注意 再受験には一定以上日数を空ける必要あり→スケジュールに余裕を持って受験 万が一GRE subjectを要求された場合は年3回・遠方 (北海道・福岡・沖縄など) での開催となるため要注意

△いずれも成績開示や送付のタイムラグを考え1か月以上余裕を持ったスケジュールを!

6-10. 証明写真

そんな些細な項目を取り上げるのかと思われるかもしれませんが💧、日中は研修医として勤務していたため撮りに行く暇がありませんでした。特に社会人の方は時間のある時にすかさず撮っておくのがお勧めです。結局どうしたかと言えば、写真技術のある後輩に頼んで昼休みに病院をさっと抜け出して撮ってもらいました。S君には大変感謝しています。

6-11. Supporting materials

多くの大学院で supporting materials の提出欄がありました。原著論文の提出欄が無い場合にはここで原著論文の PDF を、そうでないときには学会発表などで作成したポスターや学内に提出した修了論文などをアップロードしました。

6-12. 面接

書類選考に無事に通過すると面接が待っています。まず、基本的に面接に対する本格的な対策

は書類提出後で OK だと思います。これはどのプログラムの選考を通過するかによって対策が大きく変わるためと、書類提出完了から面接本番まで約 2 か月程度の期間があるためです（ただしプログラムによります）。書類選考が最も振り落とされる最大の難所であることは間違いありません。しかし、書類選考に通れば全て OK かということでもなく、実は面接によって最終的な合格者は候補者の 1/2-1/3 に絞られます。そのため、来るべき時期が来たら集中して対策することが肝要です。もし英語に自信がない場合は、出願年の 5 月くらいから 1 日 10 分程度のちょっとした対策をしておくとも安心かもしれません。私は **Speak Better English with Harry** という 1 回 10-20 分程度の podcast を聞いて、書類選考通過後の 2 か月間はその Harry さんが開いている [オンライン英会話](#) に申し込み、アメリカ英語の先生のもとで週 1 回 1 時間の練習を行いました。

面接では英語力に注意が行きがちですが、一番重要なのは内容です。例えるなら面接官（殆どの場合 PI）はその学生が研究室に所属したときにスムーズに discussion できるかをチェックしています。したがって対策例としては、まず「大学院でやりたい研究は何か」などの定型的な質問を把握してリスト化し、それに対する回答を用意します。その組み合わせでどんな質問にも答えられるように Q&A リストをアップデートします。これに加えて知識問題や変化球的な質問への対策を行います。英語では **Grilling questions** などと言われるようですが、例えば込み入った専門知識をピンポイントに問われたり、大御所からその人が開発した技術について「君は何を知っているか」と聞かれたりする可能性があります。この手の答えに詰まるような質問は対策が難しい部分もありますが、できる範囲での予想と心の準備が大事です。大学院で分野を変える人は、その分野の教科書を読むなどの基礎的な学習も重要になると思います。

以上を全て踏まえたうえで、本番では原稿の暗唱ではなく、自然な会話のキャッチボールを目指します。ここでも研究者としての discussion を意識するとイメージがわきやすいと思います。更に本番は型通りに始まるとは限りません。最初にいきなり「私に対して何か質問は?」と言われて頭が真っ白になることもあります。経験談です。

また、私が本番で最も困惑したのは、こちらから面接官へ質問する機会が多く、むしろこちらからの質問によって面接の流れが形成されることでした。これは一般的な日本の就職活動から想像される面接とは全く異なっていました。「トピック X に対するあなたの考えは?」「プログラムの特徴は何ですか?」などと単純に質問するだけではどうしても受動的になりがちです。Stanford の面接は 3 日間に渡って行われましたが、私は面接初日にこの失敗を犯し、かつ前述の通り不意を突かれたのも重なって英語・日本語を問わず今までで最も失敗した面接になってしまいました。1 日目終了時には大変落ち込みましたが、ここで諦めるのは良くないと思い、Stanford の出願で公式に assign されていたサポートの学生さん（在校生）と妹にメール・電話で相談しました。すると面白いことに 2 人からほぼ同じアドバイスが返ってきました。それは、質問の前後に短く自分自身の回答や質問の背景を付け加えると良いということです。たとえば先ほどの「トピック X に対するあなたの考えは?」という例では、「私自身は X についてこう考えている」とか、「プログラムの特徴は何ですか?」に対しては「私はプログラムのここに惹かれて募集したのですが」などといった具合です。こうすることで、自分の立場や考えを明らかにしながら相手の意見も引き出すことができ、自然な会話の形式を保ちながら能動的なやり

取り・アピールができます。このとても有用なアドバイスを受け、気を取り直して 2 日目を迎へ、結果的に合格することができました。

7. 謝辞

長くなりましたが、最後に出願の過程で支えてくださった方々について言及したいと思います。

まず、冒頭の方で登場した鄭麗嘉さん (FOS 2016) には、なんと Stanford 合格後の campus visit で再会することができました！鄭さんにいただいた留学準備の資料は出願の途中に何度も見返していて大変支えになったため、出願が終了した時点でお礼を言いたいと思っていました。お話を伺ったのがかなり前だったので急にメールを出して良いか迷っていたところ、あるきっかけから Stanford にポスドクとして来られていたことが判明し、鄭さんから Messenger を通じてご連絡いただいて 7 年越しに現地でお会いしてご挨拶することができました。

また、鄭さんとの再会のきっかけになったのが、現地で日本人大学院生のコミュニティの中心を担っている FOS 2022 の藤田創さんです。藤田さんには、出願中特に面接終了後結果報告を待っている間の不安な時期にコンスタントにサポートしていただきました。その間他の日本人の先輩 (Y さん, K さん) を紹介してくださいました。更に、合格してからはすぐに様々な実用的アドバイスをいただき、campus visit の際には日本人研究者で集まって食事会をしていただいたり (ここで鄭さんと再会)、大学内を案内していただいたりしました。

そして、大岸さん (FOS 2018) には PI へのコンタクトメールから出願終了に至るまで数多くの書類を添削していただき、これ以上ないほどお世話になりました。研究者として卓越した才能を持ち多忙を極めながら、メールで送った SoP や研究計画書に関して信じられない速さで返信をいただいたり、決定的なアドバイスをくださったりと、お願いしている身でありながらも驚愕していました。学内の研究発表会で聞いていた講演が毎回素晴らしく、その大岸さんに直接アドバイスをいただけたのは本当にありがたいことでした。

また、推薦状を書いてくださった 3 人の先生方に深く感謝申し上げます。研究の道を踏み出したばかりの自分には果てしなく大きく遠い存在ですが、理想の研究者としてこれからも目標にさせてください。

また、FOS の奨学生以外の方で氏名を掲載できなかったのですが、大岸さん同様に留学に関して添削やアドバイスをくださった大学の先輩である E さん、学部での所属研究室の皆様、そもそも研究の道への第一歩を開いてくださった最初の研究室の A 先生・K 先生、BIOMOD の時のメンターの先生方、駒場でお世話になり UCSF/Stanford の日本人研究者をご紹介いただいた M 先生、現地でお会いした日本人研究者の方々にもこの場を借りて深くお礼申し上げます。

常に支えてくれた家族の存在の大きさは言い尽くせません。

最後に、留学の目標を現実のものにする機会を与えてくださった船井情報科学振興財団の皆様にも心より感謝申し上げます。これからも研究の道を一步一步、着実に精進して参ります。